本市は、昭和十五年十一月十日、全国で一七三番目の市として誕生、本年は市制施行後七十周年目の年を迎えることとなりました。

昭和十五年といえば、すでに第二次大戦が始まっており、日本では昭和十二年から中国との間で戦争状態が続いていました。そして、翌十六年十二月八日には、日本も人類史上最大の戦争第二次大戦に参戦していきます。そしてこの大戦は、昭和二十年、連合軍の勝利で終わり、日本は敗戦を迎えます。

そんな戦中・戦後にあって、いち早く戦争の傷跡から立ちあがり、日本の文化面でリードしてきた人々のうち、芦屋に住み、文化の創造に力を注いでこられたかたたちを、今回はご紹介したいと思います。

～あのころの芦屋～

芦屋市制黎明期・文化の創造者たち

昭和15年 ▶ 35年

問い合わせ　広報課　☎38-2006／美術博物館　☎38-5432

田中 千代

日本のファッションデザイナーの草分け・田中千代学園創立者

◀昭和42年

田中千代氏は、日本のファッションデザイナーの草分けの一人また田中千代学園の創立者として、服飾界に大きな影響を与えてきました。

昭和五年、ヨーロッパ滞在中にスイスでバウハウスの流れをくむオットー・フォン・ハスハイエ教授に師事、デザインを学びます。帰国後、服飾デザイナーとして、また神戸・御影の自宅に洋裁研究グループ「皐会」を発足させ、活動を始めます。そして、デザイナーとして斬新なファッションを創造するかたわら、教育者としても洋裁研究に力を注ぎました。

戦後は、いち早くファッション・ショーを開き、また昭和二十二年にはこの芦屋に研究所を移し、やがて学校法人田中千代学園として、日本の洋裁技能教育に、大きく貢献していくことになります。

その一方、民族衣装の研究・収集や「服飾事典」の編集などに積極的に取り組み、その仕事ぶりと着実な歩みは、多くの人々を魅了してきました。

そんな田中千代氏のコラム記事の掲載が、「広報あしや」(昭和四十二年五月五日号)にあります。

その一部分をご紹介します。

『私の住居は芦屋の学園の中にあり、後は山で、学園の窓からは海が見えるという全く恵まれた土地にあります。東京と行き来の多い私は、この芦屋のわが学校、またわが家に帰ってくると、まず胸をふくらませておいしい空気を吸うのが楽しみなくらいです。芦屋の空気が私の健康を守ってくれるのだと、そんなときいつもこの地に感謝します。』

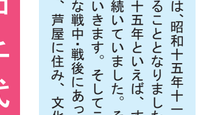
(冒頭部分抜粋)

《略年譜》

■田中　千代(たなか　ちよ)氏

明治39年　8月9日、男爵松井慶四郎・照子の長女として、東京で生まれる
大正13年　経済地理学者の田中薫と結婚（18歳）
昭和3年　夫と渡欧（22歳）
昭和4年　ベル・エポックのパリに滞在（23歳）（翌年スイス・ドイツへ）
昭和6年　夫と渡米。9月に帰国し、帰国の船上でカネボウ創始者・武藤山治夫人千世子と出会う。10月、神戸(住吉)に家を借りて住む（25歳）
昭和7年　カネボウの顧問となる。自宅で、洋裁研究グループ「皐会」を発足し、活動を始める。ニューキモノ考案（26歳）
昭和12年　田中千代洋裁研究所開設(本山)。所長となる（31歳）
昭和20年　田中千代洋裁研究所再開（＊戦争で中断）
昭和22年　研究所を本山から芦屋へ移転（41歳）
昭和27年　皇后陛下のお召し物相談役となる（～昭和34年）（46歳）
昭和30年　第1回兵庫県文化賞受賞（49歳）
昭和38年　研究室・住まいを東京分館へ移す（57歳）
平成7年　阪神・淡路大震災で、芦屋の田中千代服飾専門学校被災。閉校へ(88歳)
平成11年　6月28日に逝去（92歳）

■著作…「私の洋裁」・「図解服飾事典」・「子供服全書」「皇后様のデザイナー」など多数



④昭和22年、田中千代氏は大原町に300坪の土地と建物を購入し、研究所を本山から芦屋へと移転しました。
上の写真は、移転当時の芦屋校舎。

吉原 治良

世界が注目した 日本の前衛美術グループ〝具体〟を主宰

吉原治良氏は、抽象絵画の先駆者として、とりわけ「具体美術協会」の指導者として、多くの作家たちに影響を与えてきました。

氏は、明治三十八年に大阪の植物油問屋の次男として生まれました。関西学院在学中より油絵に親しみ、昭和三年には初めての個展を開きます。折りしも帰国中であった藤田嗣治氏に評を仰ぎ、独創性の大切さを強く教えられました。

昭和十三年には、二科会の前衛作家による「九室会」の結成に参加し、意欲的に抽象作品を発表しました。

戦後、吉原治良氏の下には関西の若い人たちが集まり、新しい表現を試みようとしました。氏は、彼らのエネルギーを結集し、昭和二十九年「具体美術協会」を結成、「具体」は今日も世界的に知られる美術運動の一つとなりました。

大正十五年、吉原治良氏二十一歳のとき芦屋に移住して以来、没するまで芦屋に住み続け、昭和二十三年には、芦屋市美術協会」を創立、同協会主催の「芦屋市展」や「童美展」を開催し、審査員を務めています。

また芦屋公園で、昭和三十年、真夏の太陽に挑む野外モダンアート実験展・翌三十一年「野外具体美術展」を開催するなど、芦屋市民の目をおおいに驚かせました。

《略年譜》

■吉原　治良(よしはら　じろう)氏

明治38年　1月1日、吉原定次郎・アイの次男として、大阪市に生まれる
大正15年　このころ芦屋に移住（21歳）
昭和4年　4月、奥田千代と結婚（24歳）
昭和9年　藤田嗣治の勧めで、二科展に初出品し、出品作5点すべて入選する（29歳）
昭和14年　芦屋の自宅にアトリエを新築（34歳）
昭和19年　胸の病いで、徴兵検査失格となる(39歳)
昭和21年　市主催の講座で「モダンアートについて」講演する(精道小学校)(41歳)
昭和23年　「芦屋市美術協会」設立。代表となる。同協会主催で第1回「芦屋市展」・「童美展」を開催し、終生審査員を務める(43歳)
※第4回から、市の主催事業となる。
昭和27年　「田中千代グランド・ショー」の舞台美術を担当。以後も何度か担当する（47歳）
昭和30年　7月、「真夏の太陽に挑む野外モダンアート実験展」を芦屋公園で開催する。
吉原製油㈱の取締役社長に就任（50歳）
昭和31年　7月、「野外具体美術展」を開催（51歳）
昭和38年　兵庫県文化賞を受賞(58歳)
昭和40年　吉原製油㈱の取締役会長に就任(60歳)
昭和45年　ルナ・ホールの壁画を制作（65歳）
昭和47年　2月10日に芦屋病院で逝去（67歳）
※3月31日、「具体美術協会」解散

①昭和7年「パジャマ・ドレス」

②昭和25年「市松柄のきもの」

③昭和37年「黒地に銀唐草柄帯地のコート」

①昭和27年、「田中千代グランド・ショー」の舞台デザイン

②昭和15年「雪山」(大阪市立近代美術館建設準備室蔵)

③昭和40年「黒地に赤の円」(兵庫県立美術館蔵)

昭和45年撮影▶

④昭和30年、野外モダンアート実験展(作品手前)

富田 砕花

〝兵庫県文化の父〟富田砕花生誕百二十年の年を迎えて…

昭和52年4月撮影

大正時代、〝民衆詩派〟の詩人と呼ばれた富田砕花氏。

住まいを芦屋に移してからは、県内各地を旅し、多くの市町歌や校歌、また、その地を題材とした詩を多く残し、晩年にはその詩業の集大成ともいえる壮大な「兵庫賛歌」を発表しました。

富田砕花(本名・戒治郎)氏が生まれた家は、盛岡市で油問屋を営む名家でした。父親は誕生前に他界していたため、伯父に漢籍の素読や習字を教授されたといわれています。

十代のころ上京、会計検査院に勤めながら、短歌を、文章世界」などの雑誌に投稿し掲載していました。

明治四十一年(砕花十八歳)には、与謝野鉄幹・晶子の『新詩社』に加わり、「明星」に砕花で短歌を発表しています。「明星」廃刊後は、若山牧水の「創作」や前田夕暮の「詩歌」にも作品を発表しました。このころの作品をまとめた歌集「悲しき愛」(明治四十三年刊・砕花二十歳)は、若い女性の圧倒的な支持を得、熱狂的なファンも多かったといいます。

大正時代に入ると、カーペンターやホイットマンなどの訳詩を手掛け、民主主義の文芸を日本に紹介するようになりました。氏の作風も自然と詩作の世界へと移り、民衆の心を代弁した作品は、大正デモクラシーの波に乗って、多くの人の心を打ち、白鳥省吾や福田正夫などとともに〝民衆詩派〟と呼ばれました。

芦屋を初めて訪れたのは、大正二年。肺を患い、芦屋の斎田家に身を寄せ療養しました。大正九年、芦屋の田島マチさんと結婚し、翌年から芦屋に定住しました。終の棲家となった宮川町の家には昭和十四年、谷崎潤一郎が住んでいた後に入居しました。

以後、昭和五十九年十月七日に九十三歳で没するまで、ここから多くの歌集・詩集を発表、また校歌や市町歌等の作詞を手掛けました。

昭和六十年、明治期から昭和にわたる氏の膨大な資料が市に寄贈され、同年発足した「富田砕花顕彰会」の手によって、四冊の資料目録が完成しています。(資料は美術博物館蔵)

平成二年には、氏の生誕百年を記念し、詩集を対象とした全国公募の「富田砕花賞」が制定されています。

そんな氏のコラム記事が、広報あしや」(昭和五十三年一月五日号)にあります。その一部分をご紹介します。

『ボクは、文学の話を人とするのが嫌いでね、東京にいると、文壇的なつながりが面倒くさくてそれでこっちにきたんですよ。(中略)芦屋でもあっちやこっちに住んだなア。

いま住んでいるのは、村の人が建てたのを谷崎潤一郎さんが借りて住んでたんだけども、谷崎さんが魚崎に移ったあと、義兄が買ってね、ボクたち夫婦に入らないかってことになったんだ』(冒頭部分抜粋)

①富田砕花旧居

②富田砕花旧居・内部

③庭内・春日燈籠

④庭内歌碑(S.61建碑)

《略年譜》

■富田　砕花(とみた　さいか)氏

明治23年　11月15日、盛岡市に生まれる(本名戒治郎)
明治41年　与謝野鉄幹・晶子「新詩社」に参加(18歳)
明治43年　若山牧水「創作」に同人参加(20歳)
大正元年　歌集「悲しき愛」出版(20歳)
大正2年　肺患を患い、芦屋で療養（21歳）
大正4年　詩集「末日頌」出版(25歳)
大正5年　カーペンター訳詩集「民主主義の方へ」出版
大正8年　詩集「地の子」出版。ホイットマン訳詩集「草の葉1」出版(29歳)
大正9年　田島マチと結婚(30歳)。訳詩集「カーペンター詩集」・ホイットマン訳詩集「草の葉2」出版
大正10年　「富田砕花詩集」出版(31歳)
大正11年　評論集「解放の芸術」・詩集「時代の手」出版
大正13年　詩集「登高行」出版(34歳)
大正15年　詩集「手招く者」出版(36歳)
昭和9年　歌集「白樺」出版（44歳）
昭和14年　宮川町の自宅(現旧居)へ（49歳）
昭和20年　空襲で自宅被災。家財・蔵書を失う(55歳)
昭和23年　第1回兵庫県文化賞受賞(58歳)
昭和25年　歌集「歌風土記　兵庫県」出版（60歳）
昭和36年　3月2日、マチ夫人逝去（71歳）
昭和45年　詩集「ひこばえのうた」出版（80歳）
昭和46年　詩集「兵庫讃歌」・ホイットマン訳詩集「草の葉」改々訳出版（81歳）
昭和50年　詩集「視差錯落」出版（85歳）
昭和59年　10月17日、心臓衰弱のため逝去（94歳）
昭和60年　富田砕花顕彰会発足。歌集「属目散趣」・訳詩集「詩集　草の葉」出版

芦屋市制施行のころ活躍していた文化人 《抄》

■中山　岩太(なかやま　いわた・明治28年～昭和24年)〈前田町〉
写真家。大正時代をニューヨークとパリで過ごし、シベリア横断鉄道で帰国。海外仕込みのモダニズムを武器に、日本の写真の近代化を推進した。昭和3年から芦屋に住み、同5年「芦屋カメラクラブ」を創立

■早野　臺氣(はやの　だいき・明治31年～昭和49年)〈浜芦屋町〉
歌人、郷土史家。本名・二郎。芦屋短歌会の創設に参画し、同会主催の「業平祭」を企画開催した。オブジェとしての短歌を唱え、吉原治良らとかかわる。昭和44年、芦屋市民文化賞受賞。著書に「海への曾話」(昭和50年)

■高浜　年尾(たかはま　としお・明治33年～昭和54年)〈月若町〉
俳人。虚子の長男。本名年尾は子規の命名。著書に「俳譜」(昭和13年)、「俳諧の手引き」(昭和21年)。昭和21年4月、虚子から引き継ぎ「ホトトギス」の主宰者(現在は、娘・稲垣汀子氏)に。昭和54年10月26日に他界(78歳)

■吉澤　独陽(よしざわ　どくよう　明治36年～昭和43年)〈西山町〉
詩人。関東大震災(大正12年)後、芦屋へ。西山町に「聖樹葉詩園」を経営。戦前「日本詩壇」を創刊。戦後は、坂本勝(元兵庫県知事)氏と「聖樹」を刊行

■ハナヤ勘兵衛(はなや　かんべえ・明治36年～平成3年)〈前町〉
写真家。本名・桑田和雄。昭和4年に芦屋に写真材料店を開き、翌5年には彼の店に行き来する人々によって「芦屋カメラクラブ」が結成された

■伊藤　継郎(いとう　つぐろう・明治40年～平成6年)〈山芦屋町〉
画家。昭和3年から芦屋に。同23年には芦屋市美術協会の創立に参加。47年には、吉原治良氏の死去に伴い、芦屋市美術協会代表(～昭和52年10月)に。昭和44年、芦屋市民文化賞受賞。同46年紺綬褒章受章。平成2年、兵庫県文化賞受賞。また、昭和58年にはアルバ芦屋の壁画「輝く芦屋」を制作

1月 テレビ広報番組ガイド 9ch.

芦屋市広報番組　あしや30(サーティー)min.　放送時間〔30分〕

オープニング	うんじゃ隊の心	①8:30
新春　市長対談	平成22年新春市長対談 市制施行70周年　さらに魅力ある芦屋へ 〈対談者　今村千顕さん・加藤悦子さん〉	②12:00 ③16:00
トピックス	芦屋市立浜風小学校食育の取り組み “収穫祭”さつまいも&大根	④19:00 ⑤22:30
新春特集	生誕100年　貴志康一を聴く 貴志康一生誕100年記念演奏会より「かもめ」「月」 芦屋病院マチネーコンサートより「龍」 芦屋市広報番組収録曲「竹取物語」	※DVD VTR貸出可

■アナログ放送は9chで、地上デジタル放送は11chでご覧ください。
■番組に関する問い合わせ　広報課　☎38-2006　■CATV全般に関する問い合わせ
㈱ケーブルネット神戸芦屋(J：COM)カスタマーズセンター　☎0120-13-8160

富田砕花旧居の開館日

■開館日時　毎週水曜日・日曜日
午前10時～午後4時
(入館・午後3時まで)
＊年始は、1月6日(水)から開館
■所在地　宮川町4-12
■展示内容　4月・10月に入れ替え
※現在、「砕花の多彩な交流3〈社会を開く人2〉長谷川如是閑・嘉治隆一・河合卯之助」を展示しています。

問い合わせ　美術博物館　☎38-5432

青色防犯灯で　犯罪の抑制を

青色防犯灯は、犯罪減少効果があるといわれます。その要因としては、波長の短い青色は遠くまで光が見えやすいことや、生理学的に青色を見ると血圧が下がり、脈拍が落ち着くといった効果があるので、心が平穏になり、本能的な衝動が抑えられると考えられています。

現在、阪急芦屋川北自転車駐輪場・茶屋之町・西芦屋町・松浜町・伊勢町の一部で青色防犯灯を試行し、地元自治会の防犯意識の高さを示し、犯罪の抑制を図っています。

市内の自治会などで、青色防犯灯設置の要望がある場合は随時受け付けていますので、下記へお申し出ください。

《ご注意》要望受け付け後、設置箇所の調査や地元との協議のため、設置までには多少の日数が必要です。ご了承ください。

問い合わせ　道路課　☎38-2062

ふれ愛シネサロン「力道山」

第18回 東京国際映画祭クロージング上映作品

1945年、貧困の祖国を離れ単身日本に渡ってきたシラクルは、力士“力道山”となり関脇にまで登りつめ、順調に綱取りを目指すのだったが、そこには目に見えない民族の「壁」が存在していた…。

波乱に満ちた人生を、疾風のごとく駆け抜けた男の壮絶な人間賛歌。

■日時　1月30日(土)①午前10時～午後0時30分 ②午後1時20分～3時50分　■会場　上宮川文化センター・ホール　■出演等　ソル・ギョング、中谷美紀、萩原聖人、藤竜也／ソン・ヘソン監督作品　■定員　各回・先着150人　■申し込み　当日直接会場へ

問い合わせ　市民生活部人権推進担当　☎38-2055

ヒューマンライツシアター「青い鳥」

臨時教師と彼が派遣された中学校の生徒たちの交流を描いた重松清の短編小説を映画化。

いじめによる自殺未遂事件に真摯に向き合おうとする教師、同級生をいじめたことで良心の呵責に苛まれる男子生徒。自らのハンディを相手への優しさに変えていく教師・村内の姿が胸を打つ。

…あなたの中の14歳に、しみる物語です。

■日時　1月23日(土)①午前10時30分～午後0時15分②午後2時～3時45分　■会場　上宮川文化センター・ホール　■出演等　阿部寛・本郷奏多・伊藤歩ほか／中西健二監督作品　■定員　各回・先着150人　■申し込み　当日直接会場へ

問い合わせ　上宮川文化センター　☎22-9229